

日本作業療法士協会 海外研修助成制度

実績報告書

発表演題名 : Feasibility of a Japanese version of the Occupational Gaps Questionnaire for
healthy people: a pilot study

学 会 名 : WFOT Congress 2022

会 期 : 2022 年 8 月 28 日～2022 年 8 月 31 日

開 催 地 : Paris, France

氏 名 : 見須 裕香

所 属 士 会 : 兵庫県

1. 発表演題の概要

作業療法においては、その人にとって意味がある活動にとりくみ、実行できるようになることに重点が置かれており 1)、その人が行いたいことや必要としていることと実際に行っていることとの間に生じる作業ギャップ 2) を把握することが重要である。我々は、作業ギャップを評価するためにスウェーデンで開発された Occupational Gaps Questionnaire (OGQ) 2) を日本語に翻訳し、日本の文化に適応させた日本語版 OGQ (OGQ-J) を作成した 3)。OGQ-J は、Instrumental Activities of Daily Living (IADL)、社会活動、余暇活動、仕事および仕事に関連する活動の 4 つの領域における 30 の活動項目から構成される。対象者は、それぞれの活動について「この活動を行っていますか」「この活動を行いたいですか」と質問され、「はい」か「いいえ」で回答する。一方の質問に「はい」と答え、もう一方の質問に「いいえ」と答えた場合が作業ギャップとなる。この度、OGQ-J が日本人の作業ギャップを評価する有用な尺度であるのか、OGQ-J の実施可能性を検証することを目的とし、健常な成人 36 名 (男性 19 名、平均年齢 31.67 ± 15.08 歳) を対象にパイロットスタディを実施した。OGQ-J を用いて対象者の作業ギャップを評価し、ギャップの種類ごとに活動項目を集計した。また、作業ギャップの数を性別で比較し、作業ギャップの数と年齢との相関分析を実施した。その結果、対象者の約 3 割が「人の手助けや支援」と「旅行」を「行いたいが行っていない活動」として選択した。「行いたいが行っていない活動」として選択された活動の多くは趣味活動や社会活動であった。一方、「行いたくないが行っている活動」として選択された活動は、「掃除」や「洗濯」などの IADL が多かった。性別による作業ギャップの数に有意差は認められなかった ($p=0.885$)。「行いたいが行っていない活動」すなわち作業ギャップは年齢が高くなると減少し、「行いたくて行っている活動」の数は年齢が高くなると増加する傾向が認められた ($r=0.345$, $p=0.0388$)。年齢と作業ギャップの関係性については先行研究 4) を支持する結果であった。また、性別によって作業ギャップの数に差が認められなかったことは、作業ギャップが性別を問わずに使用できる尺度であることを示唆している。作業ギ

ギャップの種類ごとに活動項目を集計した結果、日本人の活動の特徴をとられることができていた。調査実施時、日本では新型コロナウイルス感染拡大により緊急事態宣言が発令されていたため、社会活動が制限され、本研究の結果に影響を及ぼした可能性がある。本パイロットスタディの結果、OGQ-J が日本人の作業ギャップを評価するうえで有用な尺度であることが示唆された。今後は幅広い年齢層を対象とし、対象者数を増やして検証を行う予定である。

2. 学会参加と発表の印象

〈学会参加について〉

この度、初めて国際学会に参加した。パリのシャルル・ド・ゴール空港に到着すると、空港に学会の立て看板が掲示されており、世界中からの参加者を歓迎してくれていると感じた。学会の会場は地下鉄の駅から近く、アクセスしやすい場所であったが、日本で開催される学会のように駅などに案内掲示板はなく、案内スタッフの配置等もなかった。会場周辺には学会の電光掲示板がいたところに掲示されており、メインの大きな電光掲示板は国際学会らしさを感じた。フランスではマスク着用の義務はないため、会場ではマスクを着用している人はほとんどおらず、手指消毒や体温チェックなどもなかった。新型コロナウイルスの感染対策としては日本との大きな差を感じた。

日本の学会ではスーツ着用での参加が基本だが、スーツを着用している人は日本人くらいしかおらず、大勢の人がラフな格好で参加しており堅苦しくない雰囲気の学会であった。自分からお願いしなければ名札フォルダーや学会の資料、手提げ袋は配布されず、会場案内をしてくれるスタッフもおらず、いかに日本の学会が至れり尽くせりであるのかを実感した。ハイブリット開催であることも影響していると考えられるが、会場は予想していたよりも小さく、参加者も少なく、規模は小さいと感じた。私は参加しなかったが、レセプションパーティーやディナーパーティーも開催されていたようで、参加していればそのような場を通して世界中の作業療法士と交流ができたのかもしれない。会場には、常時飲み物やパン、フルーツなどの軽食が準備されており、参加者全員に昼食が準備されていた。会場内のフリースペースには椅子とテーブルが置かれており、軽食を楽しみながら多くの人が交流し、会話を楽しんでいた。日本の学会ではあまり見られない光景だが、多くの参加者が食事や軽食サービスを楽しみながら交流することができていて、和やかな雰囲気の学会であった。初めての国際学会参加であったが、日本の学会と国際学会の違いや、それぞれの良さを感じることができるとても貴重な経験であった。

〈発表について〉

私は電子ポスター発表での参加であった。電子ポスターは 5 台くらいのパソコンモニターで見たいポスターを検索して閲覧するシステムであったが、閲覧している人は少ない様子であった。著者名やタイトルでポスターを検索できるが、検索ワードを含むポスターがすべてヒットするわけではなかったため、重要なポスターを見落としているかもしれない。電

子ポスターの参加者は、内容について他の参加者とディスカッションする機会は少ないと感じた。ポスターを印刷して掲示している人は、多くの人と積極的なディスカッションを行っていた。メイン会場は大きく、多くの人が参加していた。

私は、この度の演題テーマでもある「作業ギャップ」（対象者が行いたいことと実際に行っていることとの間に生じる活動のギャップ）を評価する Occupational Gaps Questionnaire (OGQ) 2) をフランス語に翻訳された University of Applied Sciences and Art Western Switzerland の Isabel Margot-Cattin 先生に事前に連絡をとり、学会中にお会いすることができた。先生は認知症の人を対象にフランス語版 OGQ を用いており、OGQ をどのようにフランス語版に翻訳し文化適応したか、認知症の人を対象に評価する際のポイントなどを教えていただくことができた。日本の高齢者を対象に自己記入式の調査票で OGQ を評価した際、多くの記入漏れがあった。その点については、スウェーデン語版（原版）でも同様の課題があがっていることを著者から聞いており、OGQ の課題や今後の展望について議論することができ、今後の研究に役立つ情報を得ることができた。

この度の学会参加を通して、世界の作業療法の動向を知り、世界中の作業療法士と研究テーマについて議論することは日常では経験できないとても貴重な機会であると感じた。また、日本での取り組みについても世界に発信していける場でもある。一方で自分の英語力の足りなさを痛感した。英語力、コミュニケーション能力を身に付け、口述発表やポスター発表に参加することで、さらに世界中の作業療法士と交流することができ、学会参加がより有意義なものになると感じた。

私はこの度、作業療法士協会の海外研修助成制度の支援をうけて国際学会に参加することができたが、国際学会の参加費は臨床で働く作業療法士にとってはとても高額で、参加したくても参加できないのが現状であると感じた。そのため、このように国際的な活動を支援してくれる作業療法士協会の制度は素晴らしいと感じた。この場を借りて感謝を申し上げる。

3. 文献

- 1)Fisher AG:Uniting practice and theory in an occupational framework.Am J Occup Ther 52(7):509-521,1998.
- 2)Eriksson G,Tham K,Borg J:Occupational gaps in everyday life 1–4 years after acquired brain injury. J Rehabil Med 38(3):159-165,2006.
- 3)見須裕香, 加藤雅子, 種村留美, 岡村仁, 山本大誠:Occupational Gaps Questionnaire (作業ギャップ質問票) 日本語版の作成と言語的妥当性の検討. 作業療法 41(3):380-384, 2022.
- 4)Eriksson G:Occupational Gaps Questionnaire(OGQ) version 2.0. Swedish Association of Occupational Therapists, 2020.

4. 論文掲載情報（学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載）

OGQ の翻訳と文化適応については文献 3)に掲載されている。本パイロットスタディの結果については未発表。

